

## かえるの王さま

昔、可愛いダウン症のお姫様がいました。お姫様は、泉のそばで、鞠で遊んでいました。しかし、ふとした拍子に、鞠を泉に落としてしまいました。そこへ、かえるが現れて言いました。

「鞠を拾ってきたら、お城に招いてくれますか？」

「もちろん」

そういう訳で、かえるが泉に落ちた鞠を拾ってくれました。

しかし、お姫様は言いました。

「お城に呼びたくない」

「え、どうして？」

「キモいもん」

かえるは、意気消沈しましたが、お姫様を追って、お城までたどり着きました。

「よし、到着」

かえるが、城の食堂に行くと、お姫様が言いました。

「ヤダ、きもい」

それを見た王さまが言いました。

「なぜかえるがここに？」

「・・・泉に落ちた鞠を拾ってくれた時に約束したの」

「姫や、約束は守らないとダメだよ」

「王子のように、魔法をかけられてしまうぞ」

「王子は、かえるにされてしまったんですよね」

「もしかしたら、このかえるが王子かも知れない」

「こんなキモいかえるが王子様な訳ないですわ」

食事を終えた、お姫様は、寝室で眠ろうとしました。

そこへ、かえるが訪れ、言いました。

「一緒に寝ていいですか？」

「ちょっと、やだー！」

お姫様は、かえるを掴んで、思い切り壁に投げつけました。

「ありがとう姫」

なんと、かえるが王子の姿に戻ったのです。

「王子様！」

「姫、久しぶり」

「ごめんなさい」

「君らしいや」  
「キモいのはお互いさまでしたね」  
「ふっ、君は十分可愛いよ」  
「なぜ、魔女は王子様に魔法をかけたの？」  
「君に真実を見抜く力を持たせるためさ」  
「そんなことで、王子様に魔法を？」  
「僕が望んだんだよ」  
「王子様が？」  
「君の将来のことを考えて、みんなで決めたんだ」  
「全然見抜けなかった」  
「そうだね、失敗だったかも。でも、いいさ、君の逞しさを垣間見れたよ」  
「約束破っちゃった」  
「結婚してほしい」  
「え？」  
「結婚してほしいんだ」  
「私、ダウン症ですけど」  
「構わないさ」  
「…こちらこそ」  
「この約束は破っちゃダメだぞ」  
「ふふふ」  
　　こうして、お姫様は敬愛する王子様と結婚して、幸せに暮らしました。  
「それでもかえるは苦手です」  
「一生守るからね」

了